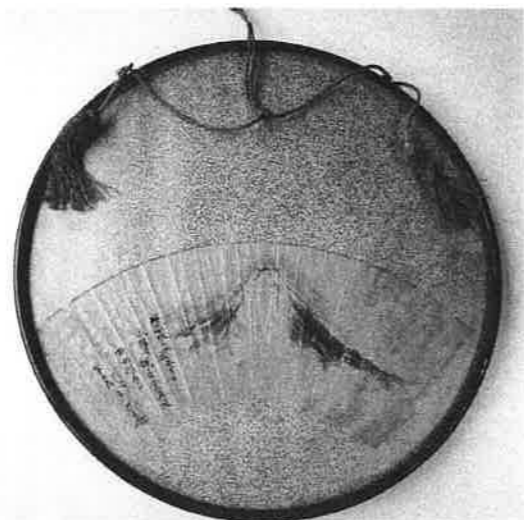




【写真⑤】永福寺の仁王門

富昌死去の後種清は独立して旧知の知多半田へ行き山車の彫刻などに携わり、尾張藩主の求めにより床置や欄間も作成している。文久元年(1861年)頃には信州に戻り同門の斎藤常吉や立川富重と木曾や塩尻で社寺や山車を手がけている。明治になってからは、急変する時代の流れの中で飯田、伊那、駒ヶ根で社寺、下諏訪学校の登竜門や皇居の造営、勝海舟から佐久間象山の銅像制作の依頼を受けている(日清戦争の勃発で中



【写真④】扇面(富士山) 額の直径450mm 扇面半径285mm

となつていきます)。この工事の飽はじめ(今で言う起工式)に使用された富昌自筆の飾り扇子が扇面【写真④】となつて残されています。この扇面は富昌から種清へ譲られ使用されていましたが、縁あって現在は私の手元にあります。扇面には富昌が好んで題材にした富士山が描かれ、あちこち破れ痛んでいて、しっかりと使われた痕跡が感じられます。扇面には時、安政三丙辰、五月七十五翁立川内匠と自著されています。

止になった)。など多方面で活躍している。明治二十九年には縁ある永福寺の仁王門【写真⑤】の建築を三千八百五十円で請け負い大棟梁の名に恥じない立派な楼門を完成させている。麒麟、漢、唐獅子、象など周囲を圧倒する迫力である。一部の彫刻が未完のままであるが、師富昌の心中を慮って、旭観音堂にならない、未完としたと思うのですがはたしてどうでしょうか。【写真⑥】仁王の阿吽像は松本の太田南海(米原雲海に師事)の作である。縁深き永福寺仁王門の造営に感慨を深くし、全力を傾注したであろう事は容易に想像できます。明治四十一年(1908年)七十六才で亡くなり浄土宗来迎寺に眠っています。(寺の西側墓地、案内板がある)。



【写真⑥】未完の彫刻

は諸説ありますが大黒様が親(兄)、恵比寿様が子(弟)として大黒様が上位である左(向かって右)、恵比寿様が右(向かって左)に並べるのが良いようです。余談ですが雛祭りのお殿様、お姫様の並べ方はお姫様が向かって右に並べるようになっていますが時代を反映して女性上位かレイファーストとなっているのでしょうか? 執筆中、眼福のひとときが与えられました事に心から感謝申し上げます。 (□□□□□) 合掌

### 立木音四郎種清の 恵比寿・大黒

岡谷 宮坂 正博

平福寺の檀家で横浜市在住の増澤マツさんから、下諏訪の旧居を片つけてゆく中で、所蔵していた恵比寿・大黒をお寺にと寄贈され



【写真①】恵比寿・大黒 一体 H100mm W63mm D75mm・210g (計)



【写真②】恵比寿・大黒の裏面の銘と花押

領した。幕末から明治にかけて立川の三四郎といわれたのは和四郎(立川富昌・富重)、専四郎(立川富種・啄齋)、と音四郎種清である。恵比寿・大黒の小品は立川流の關係で諏訪には、お持ちの方がたくさんいます。大隅流の床置きは非常に少ないのですが、立川は啄齋やその娘松代湘蘭の頃には彫刻専門となった事もあって素晴らしい床置やお盆、根付、印籠なども目にする事ができます。恵比寿・大黒に限れば、

立川四代富尊の天竜川橋の何枚目の木で彫ったという裏書きの付いた本当にかわいい小品をいくつも目にする事が出来ます。啄齋や湘蘭、富重の小品も少ないながらも目にする事が出来ますが、富昌、富棟、種清のそれは目にする事はなかなか出来ませんが、大変貴重な一品です。種清は富昌に従い二十三才から塩尻柿沢の慈眼山永福寺旭観音堂造営に携わっていましたが、翌年あと少しで竣工という時に横に立っていた樺の木を将来の建築材にしようとして伐採中、倒れてきた木のために富昌が亡くなるという大変な事故が起きました。(このため旭観音堂【写真③】は彫刻が未完成

ました。【写真①②】下面に明治十七年九月甲子日敬刻立木種清と銘と花押がある。目や髭、口、耳の彫りの深さや顔つきに種清の特長が良く表れている。唇や恵比寿が抱えた鯛には朱色が残っている。立木音四郎種清は小湯の上、土田金三郎の三子として天保三年(1832年)十一月二十二日に生まれ、幼名は音吉、後に母方の立木家を継いだ。幼少より美術工芸に秀で、十五

才の時に諏訪の二代立川和四郎富昌に弟子入りして持っていた建築や彫刻の技に才能を開花させた。(後に幕末大棟梁と言われた)。嘉永六年(1853年)六月、二十一才の時諏訪大社下社大祝・金刺信古から彫刻の号「種清」を拝



【写真③】旭観音堂